

2022.06 発行

I 着任ご挨拶（ギータ・モハン教授）

5月に極東地域研究センターの教授として着任したギータ・モハンです。私はインド出身です。前職は、国連大学サステイナビリティ高等研究所研究員で、東京大学未来ビジョン研究所客員准教授なども歴任してきました。サステイナビリティ学、気候変動に対する適応やその影響評価、気象変動の経済学、水管理とその影響評価などにこれまで取り組んできました。国連大学では、持続可能な目標（SDG）6に関する「持続可能な開発のための水」プロジェクトの包括的研究計画の立案に従事し、インドネシア、タイ、ネパール、インドなどの発展途上国の持続可能な都市水環境政策のための地方・地域環境拡張型産業連関モデルの開発に取り組んで来ました。これは、SDG1（貧困）やSDG8（ディーセントワークと経済成長）といった他のSDGと連携することで、社会福祉と環境の改善に貢献するものでした。



現在は、アジア太平洋地球変動研究ネットワーク（APN-GCR）の助成による「東南アジアの農業生産システムにおける作物シミュレーション・モデリングと気候リスクの影響に関する能力開発トレーニング・ワークショップ」に取り組んでいます。このプロジェクトは、国立農業研究システム（NARS）と政策立案者と地域コミュニティと国際機関との連携を強化することにより、東南アジア諸国の技術的・科学的な能力を強化することを目的としています（SDG-17）。このプロジェクトの一環として、ベトナムとタイから60名の参加者を迎え、作物シミュレーションモデルのための農業技術移転のための意思決定支援システム（DSSAT）ツールを用いて、作物シミュレーション法を収益性の高い、持続可能で、回復力のある農業生産システムにするための適切な戦略や有望技術の開発に関する研修を実施しました。さらに、農家と科学者の間で農作業の経験や知識を共有するための双方向セッションのプラットフォームを作りました。また、アジアやアフリカ諸国での豊富な研究経験を持ち、主に気候や生態系の変化に

対する耐性を高めることで持続可能な社会を構築し、持続可能な生活、農業生産、女性のエンパワーメントSDG1、5、13のための重要な可能な対策を開発することに取り組んでいます。

今後の研究課題は、途上国の持続可能な開発目標（SDG）の地方、地域、国レベルの進捗における指標のパフォーマンスを評価するための持続可能な評価ツールやフレームワークを開発することです。さらに、これまで私が蓄積してきた国際的な学術ネットワークや交流体験を活用し、富山大学と他の研究機関との持続可能な社会に関する研究・教育連携の拡大に貢献したいと考えています。素晴らしい同僚たちとともに新しく設置された大学院持続可能社会創成学環グローバルSDGsプログラムで教鞭をとり、富山で研究できることを大変うれしく思っています。（文責：ギータ・モハン）

II 着任のご挨拶（楊潔研究員）

2022年4月に極東地域研究センターに非常勤研究員として着任しました楊潔です。私は2020年に神戸大学経済学研究科の博士課程を修了し、以降当センターに所属し、今年の3月までにNIHUプロジェクトの研究員として「北東アジアにおける国際分業の進化と資源の持続可能な利用」を中心的なテーマとした研究活動に取り組んできました。極東地域研究センターは文理融合を通じて、社会の持続可能性を多角的な視点で捉える力を養成する試みが多く、国際的な視野を持つ研究者も多く、新鮮な気持ちで研究教育活動を行うことができます。



NIHUプロジェクトに関連する研究以外に、中国における気候変動・自然災害の影響及び再エネの環境効果に関する研究を中心に取り組んできました。現在は、環日本海学術ネットワーク特定テーマ研究支援事業の助成による「中国における再生可能エネルギーの導入による二酸化炭素排出量と大気汚染への削減効果に関する研究」を行い、投稿を目指して進めています。また、JSPS科学研究費の助成によ

り、「中国における気候変動と経済格差に関する実証研究」、「自然災害が地域の低炭素化に与える影響に関する研究」に取り組んでいます。気候変動に伴う異常気象の激甚化・頻繁化が世界中に観測されています。2019年に国連が発表したSDGs報告書によると、経済格差は世界中で拡大の一途を辿っていますが、気候変動による影響が密接に関わっているとされています。一方、SDGsの目標7「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」は、再生可能エネルギーの普及を促進することを目指していますが、気候変動の下で持続可能なエネルギーへのアクセスをどのように確保するかは大きな課題になります。現在の研究を通じて気候変動適応策立案に活用可能な知見を提供することを目指しています。

今後の研究においては、気候変動に関する研究をさらに展開し、当センターにおいて異分野の研究者との共同研究を行うことにより、研究交流を深め、いい刺激をいっぱい受けることができると思います。富山に住むのは3年目になり、最初冬の天気になじめましたが、住み続けている間に自然に恵まれ、素晴らしい同僚に囲まれている富山が好きになり、楽しい生活を過ごしています。

(文責：楊潔)

III NIHU プロジェクト総括

NIHU プロジェクトは2016年度から6年間にわたり、「北東アジアにおける地域構造の変容：越境から考察する共生への道」をテーマにするネットワーク型基幹研究プロジェクトでした。極東地域センターは当プロジェクトの経済分野を担当する研究拠点であり、北東アジア地域における持続的な経済開発及び資源利用に巡る研究活動に取り組んできました。今年3月22日に富山大学拠点の関係者10名を招聘して総括コンファレンスを開催し、6年間の研究活動をまとめて報告しました。NIHUプロジェクトにおける最後の活動として無事に終了することになりました。



図1. 3月22日総括コンファレンスの様子

総括コンファレンスの最初に当センターの馬駿先生から富山拠点の主な取り組みと成果についての全体報告がありました。図2のロードマップに示すように、富山大学拠点単位の活動として前半は森林・木材資源、後半は鉄鋼資源に着目し、フィールド調査に基づいて研究活動を行いました。同時に、拠点単位では定期的に研究者向けのワークショップを32回、プロジェクトの他拠点の研究者と協力して国内・国際シンポジウムを16回開催することによって研



図2. NIHU プロジェクトのロードマップ

究体制の強化と拠点間での連携の強化に努めてきました。また、中国の中南林業科技大学、韓国の江原大学との国際連携枠組である Northeast Asia Academic Network (NAAN) を構築し、コロナ禍以前に毎年 NAAN シンポジウムを開催することによって国際研究ネットワークを強化してきました。さらに、毎年富山県及び日本海学推進機構との連携を通じて学術的なネットワークを推進し、一般向けシンポジウム・講演を8回開催し、地域社会への研究成果の還元に貢献することができました。

それ以外に、本拠点の特徴的な取り組みは学術論文、英文書籍、ニューズレター、学会発表とデータベースといった多様な形式で研究成果を学界・社会に発信・還元したことです。特に、プロジェクト6年間における森林・鉄鋼資源に関する研究成果を取りまとめた書籍を2冊刊行しました。今度の総括コンファレンスにおいて富



山大学の今村弘子先生と当センターの和田直也先生は書籍「東アジアにおける森林・木材資源の持続的利用」の内容に関してそれぞれ「東アジアにおける資源」、「ロシアの森林資源に関する研究」を題にする報告がありました。また、当センターの金奉吉先生は英文書籍「Growth Mechanisms and Sustainability: Economic Analysis of the Steel Industry in East Asia」に関連付けて、「北東アジアにおける経済・安保のネクサスと域内分業」と題して講演しました。最後に、筑波大学の立花敏先生、神戸大学の竹内憲司先生と東京経済大学の佐藤一光先生はそれぞれ本プロジェクトに対する助言や最近の森林・鉄鋼資源と産業に関する研究動向について話題提供しました。

新型コロナウイルスの影響で2020年から多くの研究活動が中止になりましたが、全体的に見ると本拠点のプロジェクト目的が順調に達成されました。これまでの研究成果の拡大に向け、森林・鉄鋼資源データベースの構築を企画しており、今後の研究成果につながるとともに NIHU プロジェクト以外の研究活動にも貢献できることが期待されます。

(文責：楊潔)